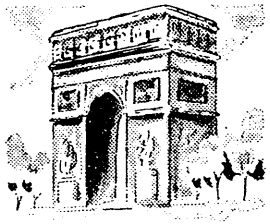
海外だより

# パリ市民の生活と社会保障

上村政彦
健康険険組合連合会



地下鉄をトロカデロで降り，シャイヨー宮の高台に立つと，セーヌをこえ，シャンドマルス公園にそびえるエッフェル塔，そして，かつてナポレオンが学んだという歴史の古い士官学校まで，一直線にその光景が見通せる。そのやや左寄りに，マロニエの木立ちにかこまれた，古びた大きな建物の並ぶ街の一角がある。そのあたりは，かつて貴族が住んでいたところだそうで，今でも，いくらかその名残りはとどめているが，世の移りかわりとともに，建物は貴族の手から新興ブルジョアジーへ，そして，中流の労働者層へと受けつがれて，今日に至っている。

社会保障について専門の勉強をするためにパリにきて，ここで生活を始めた69年4月から，私はこの一角のある通りに面した三流ホテルに暮していた。近くには，全国疾病保険金庫や社会保障を取り扱う社会問題省なども



あって，いろいろと便利でもあり，また，セーヌに近く，環境の点でも，ここはパリのなかで最高の方に属するのではないかと思う。とくに，アルマ橋からイエナ橋の間のセーヌの両岸を散歩するのは，私の異国生活の疲れをいやすに十分で，ときには，ロマンチックな気分になったりする。

しかし，それだけに，月に450フランとられるこのホテル住まいは，フランス政府がくれる月900フランの給費では，どうみてもつり合いがとれないなと思った。給料のなんと半額を住居費にとられるわけであるから，そこでの暮しは容易ではない。

ところで，食事の方は，ホテルだから，朝食は別として，そのほかはすべて外食しなければならない。ホテルの近くには，いくつかレストランがあるが，やはり場所がよいために割り高で，そこで食事をすれば，どうしても一食につき最低15フランから20フランは出さなければならない。といっても，これはもっとも安いツーリスト・メニューによるものか，あるいは，比較的に安い中華料理のことであって，普通の食事をすると20ないし30フ

ランはどうしてもかかる。毎度こんな食事をしていては，とても生活して行けない。一度出かけたことのある，コンコルド広場の近くにある「レストラン・マキシム」では，一人当たり150フランとられたことがある。

しかし，近年，パリではセルフ・サービス形式のレストランが増え，一食につき6ないし8フランぐらいで食べられるため，片道60サンチームの地下鉄に乗ってよく食事に出かける。時間があるときには，20分ばかり歩いて，シャンゼリゼ通りからピェール・シャロン通りへはいったところにあるセルフ・セルビスへ，よく出かけた。セルフ・セルビスと普通のレストランの食事代に，相当なひらきがあることからも理解されるように，フランスの食事代が高いのは人件費に原因がある。だから，食料品店から材料を買って来て，自分で料理して食べれば，かなり安く食べれることになる。これから察すると，フランス人は大食で有名だが，それでも，普通の家庭の食生活では，一人一日当たり5フランもかければ十分ではないかと思われる。事実，その後，知人の世話で，このホテルからそれほど遠くないグルネル通りの普通のアパートへ引越して，自分で食事をつくる生活をしてみると，その通りであることがわかった。

ところで，フランス人が住んでいる普通のアパートだが，私が住んだアパートでいえば，一般に，ステュディオといわれる単身者または子供のない若夫婦向きの部屋で，サロン，食堂，寝室がひとまとめになった広間に調理場，洗面所，シャワーがついており，これで月の家賃が450フランである。話しによると，この家賃は少し安い方らしいが，日本と同じように，入居するときには，一般に権利金，敷金などそれぞれ家賃の1～2か月分を払わなければならない。それに，普通の場合には周旋屋を通して借りるので，その方に家賃1年分の10%を，手数料として支払わなければならない。もちろん，アパート探しは新聞広告を利用する方法もある。私のみた限りではアパート広告では，「フィガロ紙」がもっとも充実しているようだが，一般に，日本と同じく新聞広告にはあまり信用がおけない。結局，周旋屋を利用するのが，もっとも無難な方法といえるであろうが，これにもまたいろいろあって，小さな店をかまえて一人でやっているのから，コンピューターを使って大々的にやっているのまで，さまざまである。

しかし，たいていの場合，周旋屋へ行けば200フランぐらいの屋根裏のステュディオから，1,500ないし2,000フランぐらいの大型アパートまでいろいろあり，パリの中心部でサンロや調料室を別に3室ぐらいをもつアパートの場合，1,000フラン前後ではいれるようだ。もっとも，これは私が見た古い建物のアパートの場合であって，高級住宅街の豪華アパートや，最近パリ市周辺に建設されつつある近代的アパートは，もっと高価らしい。

もちろん，これらがパリ市民の生活のすべてではない。所得の面からみると，地下鉄掃除人夫の労賃に相当するものとみられる月546フランの最低賃金から，エコール・ノルマール出身者の月額数千フランに達する俸給まで，著しい格差がみられ，実際の生活水準には，相当の差異がある。現役から退いた老人には年金があるわけだが，ここにも大きな開きがみられる。通常，年金月額は341.67～544フランの水準が，大多数の例となってい

る。つまり，公的年金には最低限が定められ，他方，給付額の算定基準となる賃金に上限が付されているために，年金額にも上限が画されこのような結果になるわけである。しかし，一般に，雇用労働者には，全国協約による補足年金制度が適用されるため，法定年金額の約半額程度が上積みされると考えられる。ニームの家族手当金庫で研修中に知り合った，ある香水店の支店長の場合には，退職すると補足年金の月額が1,500フランにのぼり，公的年金はほとんど頼りにならない額にしかすぎないということであった。

生活水準の低い方の話しになると，実際は全く極端で，これがパリ市民の生活だろうかと思われる情景が，いくらでも目につく。パリは1区から20区までに分かれているが，なかでも，もっとも生活水準の低いのは11区といわれている。ちょうど私の所属した社会保障研究所が，この近くのベルビルにあったので，パリの貧困層の実生活を眺める機会には十分めぐまれていた。その実情は，11区の社会保障金庫がおこなった調査によっても明らかである。それによると，60歳以上の39,592人の老人のうち，その大多数は1日に5.70フランの生活費しかもっていないそうである。これらの老人には，おそらく公的年金制度の適用がないのだと思うが，この区の住民の大部分が，アルジェリア人やチュニジア人などのアラブ系の人たちであることを考え合わせると，それは事実ではないだろうか。この調査によると，同区の住民はその38%が筋肉労働者で，平方キロ当たり53,000人が居住し，とくにフォリ・メリタール通りやロケット通りなどでは平方キロ当たり人口は150,000人に及ぶそうである。彼等の生活は極めて非衛生的で，この地区の9万戸の住居の50%は1人当たり面積が極端に狭く，53%は，風呂はもちろん，シャワーも水洗便所も備えていないそうである。そして，フランス全体としては，恒常的な出生率の停滞に悩んでいるにもかかわらず，逆に，この人口周密地区では，むしろ望まれない子の出生が相次いでいるといわれる。伝染病等の罹患率も相当に高いといわれ同調査は，もはや社会保障によるこれらの実情の改善は望み得ないとして，絶望的な結論を出している。

**社会保障こぼれ話**

チリーの被用者医療基金

この国の疾病保険は，賃金労働者と俸給取得者によって，それぞれ仕組みが異なっている。たとえば，前記の制度は現金給付と現物給付が双方とも含まれているのに，後者の制度は，現物給付だけで，現金給付の代りに，労働不能の間にも俸給を支払うことが，使用者に要求されている。ちなみに，そのようにして支払われる俸給は，労働不能の当初1月間の100%から，4カ月目の25%まで，次第に引下げられる。なお，賃金労働者の現金給付は，過去6カ月間における賃金平均額の100%が，52週間（特殊な場合78週間）支給されることになっている。

ところで，賃金労働者の現物給付，つまり医療給付は，国民保健サービスの施設を用いて提供されることになっているが，1968年から実施された法律により，被用者に対して医療を提供するために，医療基金が設けられた。この医療基金による医療